

龍源寺の歴史について(五)

松原 泰道

龍源寺を開基された奥平昌成公の数代前の先祖に家昌公という方があります。

公は宇都宮城主で、母は有名な亀姫(家康の女)です。父の信昌公は加納の城主でしたが、神の夢告通りに宇都宮に封ぜられたと伝えられています。

宇都宮入城のはじめ、古今の名僧物外(もつがい)和尚に帰依して同地に興禅寺を建てて、常に禅のおしえを学びましたが、臨終にあたり、和尚に

花も根に

かえるといえは

われもまた

生れぬさきの

里にかえらん

と、辞世を呈しました。さすがに平素、和尚に参禅しただけの力量が感じられます。

ところが物外和尚は「美事！」と賞めるどころか

「ぐずぐず言わずと死と取り組むがよい」と厳しくおしえました。公は、深くうなずくと静かに息を引きとったといわれます。

一生の最後にあわて苦しむのは、ふだん心がまえが出来ていないからだといわれます。その心がまえが出来ていれば、りっぱな辞世も作れるでしょう。普通なら家昌公の態度は美談として讃えられるところです。

然し、禅の巨匠から見ればそれも「未熟」として許されなかつたのです。苦しい死に直面した時、何も思わず、求めずに、ただひたすらに死を見つめ、死と対決してゆけ、と簡潔にしかも親切に提示せられた物外和尚の一言に、公ははじめて生死を脱却することが

出来たのです。

微笑を浮べて生を閉ずることはむつかしいが更にその一線を超えて、苦しみを、すなおに苦しみとして受けとって去ってゆくのが、ほんとうの「従容(しようよう)の最後」であることを公はその刹那に悟ったのです。

ふだんの参禅が最後に花を開き、実を結んだのです。いわゆる「行いすました」修養の積徳を超えて、すなおに、淡々と、氣ばらずに、肩をはらずに、「偉大なる平凡・充実した常識」こそ禅の風光なのです。その域に達するには不断の努力が必要です。

同じ辞世でも「偉大なる平凡」の背景がないと戯論に過ぎないことを公は体得すると共に、貴い教えの遺産を残されたのです。